

国際シンポジウム

# 原爆投下をめぐる『記憶』と『和解』

— 平和構築における広島の新たな役割を探る —

Competing Memories of Hiroshima:  
Quest for a New Role of "Hiroshima" for Peace and Reconciliation in the 21st Century

報告書

日時 平成14年8月3日(土) 13:30 ~ 16:30  
会場 広島国際会議場 地下2階 ヒマワリ  
主催 広島平和研究所  
後援 (財)広島平和文化センター

広島平和研究所は、本年8月3日、広島国際会議場において、「原爆投下をめぐる『記憶』と『和解』  
平和構築における広島の新たな役割を探る」と題する国際シンポジウムを開催いたしました。

広島での被爆体験を伝えることは、平和のメッセージとして今もなお重要な意味を持っています。しかし、原爆投下から半世紀以上が経過した今、被爆体験をどのように継承すべきなのかが問われています。原爆と戦争の記憶は、広島、日本、アジア諸国、そしてアメリカ等の国や地域における戦後の平和思想の形成において、多様な、そしてしばしば相矛盾する意義を与えられています。シンポジウムは、こうした多様な原爆と戦争の記憶を比較検討することを通じて、もう一度「ヒロシマ」の記憶が持つ「平和のメッセージ」を見つめなおし、その現代的な意味について考え、広島から発信する平和のあり方について探ってみることをねらいとして開かれました。

パネリストには、東京大学法学部教授／藤原帰一氏、米国・タフツ大学歴史学教授／マーティン・シャーウィン氏、中国・黒龍江省社会科学院副院長／歩平氏、韓国・世宗研究所研究委員／李淑鍾氏の4人をお迎えし、当研究所からも水本和実助教授が参加しました。

まず前半で各パネリストから報告をいただき、続く後半ではパネリストと聴講者との間で活発な意見が交わされるなど、大変意義深く、実り多いシンポジウムであったと考えます。

このシンポジウムの内容を取りまとめました本書が、21世紀に「平和」と「和解」をもたらすための、広島の果たすべき新たな役割を模索する上で、少しでもお役に立つことができますことを切望いたします。

---

## 目次

---

プログラム.....	3
主催者あいさつ	
広島平和研究所長 福井 治弘 .....	4
パネリスト報告	
1．戦争はどう記憶されてきたか .....	6
(藤原 帰一)	
2．史上初の核戦争が遺したもの .....	9
(マーティン・シャーウィン)	
3．中国から見た原爆投下の意義と 戦争の記憶をめぐる中日関係.....	14
(歩 平)	
4．韓国における「ヒロシマ」の記憶、 韓日の和解に向けての努力.....	17
(李 淑鍾)	
5．広島から見た被爆体験と21世紀の広島の役割 .....	21
(水本 和実)	
パネルディスカッションおよび会場との質疑応答 .....	25
総括	
平和構築における広島の新たな役割.....	36
(藤原 帰一)	

---

## プログラム

---

13:30 開会

「主催者 あいさつ」

「パネリスト紹介」

13:35 パネリスト報告

1. 戦争はどう記憶されてきたか

(藤原 帰一)

2. 史上初の核戦争が遺したもの

(マーティン・シャーウィン)

3. 中国から見た原爆投下の意義と

戦争の記憶をめぐる中日関係

(歩 平)

4. 韓国における「ヒロシマ」の記憶、

韓日の和解に向けての努力

(李 淑鍾)

5. 広島から見た被爆体験と21世紀の広島の役割

(水本 和実)

15:15 休憩

15:25 パネルディスカッションおよび会場との質疑応答

16:25 総括 平和構築における広島の新たな役割

(藤原 帰一)

16:30 閉会

---

## 主催者あいさつ

---



福井 治弘  
広島平和研究所長

---

本日は大変多くの皆様方にご参加いただきまして誠にありがとうございます。また、司会を務めていただく藤原先生をはじめ、アメリカ、中国、韓国からお越しいただいたパネリストの先生方に、心からお礼申し上げます。

本日のシンポジウムのテーマは「原爆投下をめぐる『記憶』と『和解』」です。この「記憶」という言葉は、日本語では単数のように見えますが、英語のタイトルを見るとおわかりのとおり、「Memories」と複数になっております。記憶が複数であるということが、これまで広島メッセージがなかなか世界に伝わってこなかった1つの要因ではないかという問題意識をもって、このシンポジウムを企画いたしました。

複数の「記憶」が、原爆の問題に限らず、戦争・平和の問題にとって非常に重要な問題であることを、実は我々は最近になって少しずつ理解し始めています。当研究所の姉妹研究所ともいえる長崎の平和研究所が、2000年11月に、「日蘭戦争と原爆展」という展覧会と同時に、国際シンポジウム「アジア・太平洋戦争と民衆の記憶 『過去の克服』と21世紀への展望」を開催しました。長崎平和研究所が出している『長崎平和研究』の昨年4月に出了た11号にそのときの状況が非常に詳しく書かれています。

日本とオランダが1600年に修好を結んでから400年たった日蘭修好400年記念に、何か共同の行事をしようというのが、そのようなシンポジウムと展覧会を開催するきっかけでした。そのシンポジウムで話し合われたことは、我々が今、問題意識として持っているのと非常に近い、恐らく同一のものだと思います。

『平和研究』11号の中には、岡山大学文学部の中尾知代先生が、「長崎で考える戦争・原爆展」というタイトルで書かれている論文があります。そこで中尾先生は、戦争中に日本がタイとビルマを結ぶタイメン鉄道の鉄橋を作りましたが、このときの捕虜に先生ご自身が面接をされて、聴取された証言を書かれています。タイメン鉄道事件は、何十万人もの捕虜とアジアの占領地域から集められた労務者が強制労働をさせられて、5～12万人もの人が亡くなったという事件です。そのときに労働者として使われていたオランダ人の捕虜が、広島に原爆が落とされたときに、自分が今まで神様に祈ってきたことがやっと最後に聞き届けられたと思って、神様に心から感謝した、と言っているのです。

これが「記憶」の多様性の一例です。広島の人や日本人にとっては悲劇であり、あれを見て喜べる余地はみじんもないはずの事件が、明日殺されるかもしれない、毎日バタバタ人が死んでいくような過酷な状況に置かれた捕虜にとっては神様の恵みであった、という記憶です。これは非常に極端な例かもしれませんが、実は非常に一般的な、日本以外の、日本の占領地域や捕虜になった方々の持たれた共通の意識である可能性があるわけです。中尾先生の論文を読んで私は非常にショックを受けました。本日のシンポジウムは、こういった問題をもう一度考え直して、そこから核兵器の廃絶に向かって努力しなければならない、そういう意識のもとに企画いたしました。

皆様には、各パネリストの先生方のご報告をごゆっくりお聞きになって、それに続く質疑応答の時間には活発に議論していただきたいと思います。どうぞよろしくお願いいたします。

シンポジウムの  
会場から



## 1. 戦争はどう記憶されてきたか

藤原 帰一  
東京大学法学部教授



東京大学法学部教授。インドネシア大学日本研究センター客員教授。東京大学法学部卒業、同大学院法学政治学研究所修士課程修了後、フルブライト奨学生としてイェール大学大学院政治学研究所博士課程で学ぶ。専門は、国際政治・比較政治・東南アジア政治。東京大学社会科学研究所助教授、ウッドロー・ウィルソン・センター研究員、ジョンスホプキンス大学高等国際研究大学院客員研究員などを経て、現職。『戦争を記憶する - 広島・ホロコーストと現在』『テロ後 - 世界はどう変わったか』など多くの著書のほか、論文・書評で幅広く活躍中。

皆様、こんにちは。広島でこのような会合に出席させていただけることを、心より感謝いたします。

皆様は本日のシンポジウムのテーマが、少し変だとお考えになるかもしれません。つまり、戦争の「記憶」をタイトルにしているからです。戦争の「記憶」が議論の対象になるはずがない、戦争について大事なものは、それを覚えていることであって、記憶の中身が問題になるというのはいぶか変だ、とお考えになるかもしれません。

ところが、戦争の記憶は実は1つではありません。それどころか、1つの戦争から実に様々な記憶が生み出されます。これは学者の抽象的な問題ではないのです。と言いますのは、その記憶をめぐる紛争、戦争をどう覚えてきたか、その覚え方の違いによる紛争が、現代の世界で大きな問題になっているからであります。

例を挙げましょう。シンガポールに行くと、第二次世界大戦が1942年に始まったことがわかります。シンガポールの人にとっての第二次世界大戦とは、1942年2月15日のシンガポール陥落に始まったこととなります。そもそも日本人と戦争の始まりの認識が違います。

そして、シンガポールでは華人虐殺という事件がありました。中国系の住民を日本軍が

捕まえて、最終的には虐殺するという事件です。何人死んだかははっきりしませんが、5000人以上と推定されています。この事件について、南京事件以上に知っている日本人は少ないでしょう。そのことに彼らは衝撃を受けるわけです。第二次世界大戦を日本人が知らないことにはなくて、シンガポールから見た戦争を日本人が知らないことに、大きな衝撃を受けるのです。

このように、戦争の記憶とは、それぞれの地域における戦争の経験に根ざしたものであって、それぞれに違った意味合いを持っています。さらに厳しい言い方をすれば、それぞれの記憶はやはり選択的で、言ってみれば覚えることを覚えていて、語り伝えることを伝えるわけですが、伝えないこともたくさん出てきます。それが様々な紛争を招くこととなります。

戦争の記憶の多くは、自分たちの犠牲についての記憶です。自分たちの仲間、自分の国の誰が死んだのか、それが戦争の記憶として語られるものの中心になります。そこでは外国人の死者について語られることは少ない。とすると、それぞれが自分たちの仲間が殺された記憶、それぞれの戦争の記憶と向き合うときに、争いが生まれることとなります。

しかし、戦争についてのそれぞれの記憶が出合うことが紛争につながるとは限らないし、

紛争につながってはいけないという視点から、本日のシンポジウムは企画されています。

ここでは、広島を経験を世界に伝えることだけでなく、広島を経験が世界各地でどのように違う形で認識されてきたかを見ていくことが、大きなねらいになります。その目的は、「ヒロシマ」も1つの経験にすぎない、とそれを嘲笑するような失礼な態度をとるということではありません。そういう問題ではない。そうではないのですが、戦争の記憶をできる限り広い視点から見ることが、我々にはあるだろうと思います。

中国の人にとって、戦争とは中国における死者のことでした。そこでは「ヒロシマ」について語られることは少なかった。しかし、今日おいでいただいている歩平先生は、中国を超えた視点から中国の戦争を見ることができる方です。

韓国の人にとっては、戦争とは何よりも「日本帝国主義の支配」という言葉と結びついたものでした。そこでも、「ヒロシマ」の意味は決して大きく取り上げられてきたわけではありません。しかし、李淑鍾さんは韓国における戦争の見方もご存じですし、日本における戦争の見方もご存じだというユニークな立場から、広い視点で議論できる方です。

そして、それらはまた、我々が日本にいて戦争を語る時に、どのように広い視点から語ることができるのかという問題に重なってくるものだと考えています。

時間の都合上、3つの問題点を簡単に申し上げて、すぐに報告に移っていただきます。

1つ目は、戦争の記憶はもはや過去の問題ではなく、むしろ現在の国際紛争になってしまっているということです。日中関係をご覧になればわかるように、日本と中国の間には、確かに利益の対立はありますが、最も妥協の

難しい対立は戦争の記憶をめぐる対立という歴史問題になっています。そして、我々が過去の戦争について語らない限り、中国との友好は達成できないという状況にもなっています。ですから、これは現在の問題だという点を確認しておきたいと思います。

そして2つ目に、戦争の記憶は地域によって大変違います。私は『戦争を記憶する』という本を書いたのですが、その動機となったのはスミソニアン博物館の原爆展でした。私がこの展覧会に対して決して肯定的でなかったということは、言うまでもありません。

その展覧会に、あるアメリカ人の老人がいました。この人は、「ヒロシマ」のことではなく、第二次世界大戦中に日本をやっつけた話を小さな子供たちに向かってしていたのです。私は彼の立場に同情は感じませんでした。ですが、この人にとって原爆投下は嬉しい出来事だったと知って、大変驚きました。それは、この人がサディストだということではありません。飛行機に乗って戦争に参加したこと、広島に原爆が投下されたこと、戦争が終わるからもう自分が死ななくてもいい、もう戦争は終わった。その個人の喜びと、正義が実現されたというイデオロギーがつながるわけです。

ここでは個人の小さな戦争の記憶が大きな戦争の記憶と結びついて、私から見れば偏った戦争の見方を生み出すことになっていきます。それはひどいじゃないかと言うことはもちろんできますし、私もひどいと思います。ただ、もしそうであるなら、なおさら、様々な地域で戦争がどう認識されたのかを見る必要があります。これが2つ目の問題です。

3つ目の問題は、戦争の記憶が将来の戦争を防ぐ手段として大きな意味を持っているということです。これは広島で改めて申し上げる



までもないかもしれません。というのは、「ヒロシマ」のメッセージが、核兵器を廃絶すべきだということと並んで、将来の戦争を絶対にしてはならないという反戦のメッセージでもあったからです。しかし、我々日本人が戦争について記憶していない人だと言われたらどうなるでしょう。

日本人の多くは、日本は絶対に戦争をしない国として戦後生きてきたのだと考えています。戦争の記憶とともに生きてきたと考えています。しかし、我々が考えている戦争の記憶と、日本人は戦争を見ていないのではないかと外から言われる戦争の記憶との間には、ずれがあります。これは、必ずしもどちらが正しいかという問題ではありません。ただ、日本が海外への侵略に目を向けない限り日本は戦争を忘れていたのだという議論が海外にあって、そして国内では、日本は自分たちがこのように犠牲になった戦争をこれからも繰り返してはならないと考えている。この2つの考え方の間に大変大きなずれがあるのは、恐らく事実であります。

しかし、様々な見方があるということを見ただけではいけません。また、他の見方を否定するというだけでも、たぶん答えは出てこないでしょう。そうではなく、第二次世界大戦が様々な地域のそれぞれの人にとってどういう意味を持ったのかということを考えること、それが将来に向けての選択の基礎になると思います。

繰り返し申しますが、これは現実的な問題です。9月11日のあと、すでに核兵器は、持つことによって戦争を抑止するという存在であることを超えて、具体的に紛争で使われる可能性が増えています。現在、核兵器についての問題は、それが将来の核戦争に結びつくのではないかとという将来への危険ではなく、

現在の戦争に使われるのではないかとという危険性の問題です。

正義の戦争というレトリックも用いられるようになっていきます。この考え方は、アメリカ社会の中で生まれてきた独自の根拠のあるものになってきています。

このように、戦争の危険性が高まっている時代には、過去をねつ造したり、過去を自分たちの都合のいいように解釈することで新たな政策を正当化するということが、様々な場面で出てきます。アメリカの政策だけでなく、日本社会においても、日本の戦争の記憶を都合のいいように書き換える行為が行われています。だとすればなおさら、より広い視点から戦争の記憶について考える必要があるのではないかと思います。

このような全体のねらいに基づいて、各パネリストからのお話をいただきたいと思いません。

## 2. 史上初の核戦争が遺したもの

マーティン・シャーウィン  
米国・タフツ大学歴史学教授



米国・タフツ大学歴史学教授。イエール大学米国史研究客員教授、ウエズリー・カレッジ国際関係論客員教授。ダートマス大学卒業、UCLAで博士号取得。米国歴史著作賞を受賞した“A World Destroyed: The Atomic Bomb and the Grand Alliance”(『破滅への道程 - 原爆と第二次世界大戦』)は、原爆投下に至る第二次世界大戦中の米国核政策をテーマとしている。その後新版として“A World Destroyed: Hiroshima and the Origins of the Arms Race”(『破滅への道程 - 広島と軍拡競争の起源』)を出版した。現在、原爆製造計画を指揮したオペンハイマー博士の伝記(共著)を執筆中。このほかに、核に関連した多くのドキュメンタリー番組等を手がけている。

本日は、このような重要な会議にお招きいただき、また若く優秀で、元気の良い研究者の皆様とともに参加することができまして、非常に光栄です。私の報告は、「史上初の核戦争が遺したもの」と題しておりますが、もちろん、『史上初の核戦争』とは、あの恐ろしい、そして私自身は不必要だと思ふ広島と長崎への原爆投下のことです。原爆投下に対しては、その後もずっと波紋が続いておりますが、本日は、その原因と影響についてお話ししたいと思います。

しかし、本題に入る前に、核兵器が置かれた現在の状況から話を始めさせていただきます。この件に関しては、良いニュースと悪いニュースがあります。第1の良いニュースは、長崎以来、核が一度も使用されていないということです。もっとも、1962年のキューバ危機では危うく核戦争になるところでした。また、最近起きたインド・パキスタンの対立でも核が使われるかもしれないという脅威を感じずにはいられませんでした。2番目の良いニュースは、核拡散が、1950年代から60年代に予測されたほどには広がっていないという点です。現在ある核兵器の数は、冷戦時代よりむしろ少なくなっています。以上良いニュースを申し上げましたが、核兵器に関する良いニュースは実にこれだけです。

それに引き替え、悪いニュースの方は数多

くあります。最初に、1945年に4発あった核爆弾、そのうち2発が日本に対して使用されましたが、その時4発であったものが、今では何万発にも増え、1980年代には恐らく6万から7万発になっていました。さらに悪いことには、核拡散が縦横に進み、核兵器の数だけでなく、核保有国の数も増えています。これは、保有国にとっては核兵器が役に立つ武器であるという幻想によって引き起こされている現象です。言い換えれば、核兵器は良いものだという幻想です。恥ずかしいことですが、このような神話を最初に言い出したのは私の祖国、アメリカ合衆国です。アメリカは、核抑止力といった概念を持ちだして核の正当化を行い、核保有は影響力や権力の証であるというようなことを世界に向かって示しました。

冷戦が終わって10年以上が経った今日なお、ブッシュ政権は核兵器の先制使用をほめかすドクトリンを公表しています。また、アメリカの安全保障政策の中で、核の重要性を増そうとしています。さらに、ブッシュ政権は、ミサイル防衛構想という隠れ蓑を使って予想もつかない核兵器の軍拡競争を押し進めようとしているのです。ミサイル防衛構想は、それ自体危険な政策である上に、ABM(弾道弾迎撃ミサイル制限)条約に違反し、この条約を無力化しています。

では、なぜ核兵器をめぐるこのような悪い

ニュースが次々と聞こえてくるのでしょうか。もちろん、様々な理由が考えられます。経済的、軍事的、文化的な理由もあるでしょう。しかし、全ての理由の原点に、広島と長崎への原爆投下という歴史的な出来事があります。第二次世界大戦が終わろうとしていたあの時期に、日本の都市へ原爆を投下する必然性があったわけではありません。この決断を下したのは、ルーズベルトとトルーマン政権でしたが、両政権は、戦時中だけでなく、戦後の状況も踏まえてこの決断を下したのです。これは、非常に重要な点で、アメリカでは論争になる点でもあります。自分たちの指導者が、25万人以上の一般市民を殺戮<sup>さつりく</sup>するような決断を、戦後に外交上、優位に立ちたいために下したと信じたいアメリカ人はいないのです。しかし、広島・長崎の原爆投下に関連する覚え書きや、日記、その他の記録を歴史家が調べた結果、トルーマン大統領とその複数の顧問、特に当時のジェームス・バーンズ国務長官が、戦後ソ連に対して脅しをかけるために日本の都市に原子爆弾を投下する決断を下したことは、紛れもない事実です。もし原子爆弾が予想通りの破壊力を持っているなら、その威力によって、ソ連政府が支配する東ヨーロッパや、中国やモンゴルなどの極東諸国への野心を抑えることができるであろう、とトルーマン政権の人々は考えたのです。

このような態度が、どのようにして生まれたかを私たちは問いたださなければなりません。一体、なぜこのような期待を持つようになったのでしょうか。1939年に核分裂の発見が世界に発表されると、核分裂を利用して破壊的な兵器を製造することが理論的には可能だということが、世界中の物理学者の間に知れ渡りました。アメリカとイギリスにとっては、当時、物理学や工学で世界をリードし

ていたドイツがこのような原子爆弾を製造する最初の国になるのではないかと、ということが何よりも大きな懸念でした。1941年後半にイギリスの科学者が、原子爆弾を比較的短時間で、恐らく2～3年で製造する方法を考えついた時、両国の恐怖はますます大きくなりました。その発見は、核分裂の発見からわずかに2年後のことです。ドイツの方が先に同じような方法を見つけているかもしれない、ドイツが1番に原子爆弾を保有することになるかもしれない、と考えたわけですが、恐怖にとりつかれたアメリカの科学者は、ルーズベルト政権の高官、大統領、そして自分たち科学者自身に、万一ドイツの方が先に核兵器を開発すれば、戦争でドイツに勝つことは不可能であろう、と熱心に言い聞かせました。イギリスでは、チャーチルと側近が同様に、核兵器こそが勝利への鍵だと信じ込んでいました。かくして、1945年4月にルーズベルト大統領が死去した頃には、核兵器が究極の兵器として存在感を増し、侵しがたい威力を持つまでになっていました。核兵器さえ保有すれば、戦争に勝利し、アメリカの管理下での平和が保障されるといった信念が生まれ、人々は核兵器を新しい可能性を秘めたオールマイティの兵器と見なすようになっていたのです。

アメリカが戦後の世界で核兵器を独占することの意義に対する期待感は、すでにその時点で膨らんでいたものの、ルーズベルトの死去によってさらに大きく膨らみました。というのも、ルーズベルトは核の持つ優位性と同時にその危険性についても熟知していました。また、ルーズベルトには豊富な経験もあり、たとえ戦争中に側近が核の使用を提言しても、それに反対の決断を下す自信もあったようです。しかし、1945年当時のトルーマンは、ルーズベルトとは対照的でした。外交の経験

がなく、大統領としての自信も持ち合わせていませんでした。強硬派のアドバイザーたちが、直感に訴えるような単純な解決方法を持ち出すと、トルーマンは簡単に揺らいでしまったのです。

このようにして、本日のテーマである「史上初の核戦争が遺したものの」が問題になります。ルーズベルトは死に際して、2つの考え方、言うなれば2つの遺産を遺しました。1つは、戦争中に原子爆弾の使用を許可したことです。ルーズベルトは、1944年9月にチャーチルに対して次のように述べています。「十分に検討した上で、日本人に適切な警告を与えた後に、恐らく、日本に対して原子爆弾を使用しても良いかもしれない。」次に、戦後ソ連と対決するためには、アメリカが唯一の核保有国となることが有用であろう、という考えをルーズベルトは受け入れました。そして、まだ経験の浅いトルーマンが大統領になって数か月の間に、これら2つの考え、いわばルーズベルトの遺産である、戦争中の核の使用と、戦後における核保有の利点が1つになったのです。都市に対して原子爆弾を投下することで、核の破壊力を見せつけ、うまくすれば戦争をただちに終わらせることができるかもしれない、そしてそれは、戦後ソ連に対して新兵器は対抗不可能であると思わせるために必要なステップであると考えられるようになったのです。言い換えれば、トルーマン大統領とジェームス・バーンズ国務長官は、核兵器を使用すべきであると考えたのです。他の爆弾は戦争中にさんざん使用されてきましたから、原子爆弾も実際に使用可能な兵器であることを実証する必要がある、と彼らは考えたのです。

核兵器があまりにも恐ろしい兵器であるという理由から、その使用を拒否すれば、アメ

リカは今後も核を使用できないことになる、と彼らは考えたのでしょうか。また、戦争を1945年8月に終結させるために核の使用が必要だったと私は思っていますが、そのような理由からアメリカが核兵器の使用を取りやめたなら、原子爆弾の軍事的な価値が実証されないままに終戦を迎えることになり、戦後世界における原子爆弾の外交的価値が低減するかもしれない、と恐らく当時のトルーマン政権は考えたのだと思います。このようにして、戦争の継続と、戦後ソ連と対決するために核兵器の有用性を実証しておきたいという期待が1つになり、その勢いは日本の都市への原子爆弾投下に反対するあらゆる議論を凌駕するようになりました。

皮肉なことに、世界初の核戦争が遺した2番目の遺産は日本政府の対応でした。日本国民に対して降伏の説明をした天皇の演説の中で、昭和天皇は原子爆弾のことに触れ、核兵器が格別強力な武器であると述べました。天皇は日本国民に、「戦況が必ずしも日本に有利ではない」と述べただけではなく、アメリカが破壊的で「無慈悲な新型兵器」を使用したため日本は降伏を余儀なくされたと説明しています。このような声明によって、アメリカ国民が原子爆弾は戦争の終結に効果があったのだと信じるようになったのは当然の成り行きでした。また、アメリカの軍事戦略家や政治家も、戦後の世界で核の威力による外交を展開することへの彼らの期待が間違っていなかった、と自信を強めたのです。

戦争が終わると、アメリカは即座に核の威力を外交政策に用いるようになりました。ソ連は、これを「核外交」と呼びました。1946年のイラン危機の際には、トルーマンは核の威力を用いて無言のうちにソ連を脅しました。1948年のベルリン封鎖の時にも、

トルーマンは、原子爆弾の搭載が可能な爆撃機をイギリスに送り込み、同様の脅しをしています。朝鮮戦争の最中には、マッカーサー元帥が中国に対する核の使用を要請しました。核外交の最も顕著な例として知られている事件では、アイゼンハワー大統領がインドの大使を介して、もし中国が板門店で会議で和平に合意しなければ中国に対して核攻撃を辞さないと伝えたとされています。さらに、アイゼンハワー政権のジョン・フォスター・ダレス国務長官は、核兵器による大量報復戦略のドクトリンを公表し、推進しました。まさに、このドクトリンこそが史上初の核戦争が遺した露骨な遺産であり、次の核戦争も辞さないという決意をアメリカの国家安全保障政策の中核に置くものだったのです。このドクトリンは、非常に荒っぽく、不快で倫理にもとるものでしたから、ジョン・F・ケネディが政権をとると、洗練された構想によってカモフラージュされました。ケネディ政権は、相互破壊と核抑止力の理論を展開し、ダレスの大量報復戦略から防衛主体の戦略に転換しましたが、それでも核兵器の存続と民間人に対する核の使用をアメリカの国家安全保障政策の中核に置き続けた点では、変わりありません。

そのため、冷戦時代には両陣営に属する有力国が次々に核兵器を保有しようとする事になりました。アメリカに次いで、1949年8月にソ連が第2の核保有国になり、続いてイギリス、中国、フランス、さらに、イスラエル、インド、パキスタンと続きます。

核兵器の歴史では、重要な展開が1960年代から70年代以降に見られます。戦略兵器制限交渉（SALT）が始まり、条約が締結されました。レーガン政権の間でさえも、戦略兵器削減交渉（START）は続きました。その一

方でレーガン政権は、核兵器を増産し、宇宙ミサイル防衛構想（Star Wars）に着手しました。

そして再び間違った考えによる危険な核の冷戦の遺産が生まれました。その遺産とは、アメリカによる核兵器の増強がソビエト連邦の崩壊を引き起こした、といふとんでもない理論です。これは、全くのナンセンスであり、事実の歪曲であり、単純化なのですが、アメリカで核兵器を推進したい人々にとっては非常に都合の良い理論でした。そして、多くのアメリカ人がこの理論を受け入れてしまいました。ですから、残念なことに冷戦が終わっても核兵器はなくなりそうにありません。過去に核兵器を推進してきた人々は、少なくともアメリカでは、今後しばらく核を効率的に推進しようとしています。

過去50年にわたる広島・長崎への原爆投下に関するアメリカ人の論議は、私に言わせれば、枠にはめられ、実際には起こらなかった事件によって歪曲されています。その事件とは戦争終結間際の日本の侵略です。広島と長崎が遺したものに正面から向き合うためには、もし原爆を使用しなかったならどうなったかを検証する必要があります。このような質問を発すると、たいてい日本の都市への原爆投下がその後の核兵器の使用を押しとどめることになったのだというレトリックが返ってくる人が多いのです。たとえば、朝鮮戦争、ベルリン封鎖、キューバ危機、ベトナム戦争などでの核の使用が抑制されたのは、日本での経験のためであるといった理論です。

このような理論は、論理的な帰結というよりも、結果を無理やり合理化しているように思えます。もし、トルーマン政権の陸軍長官が自分自身の情勢判断に基づいて、大統領にアメリカは原爆の使用を避けるべきだと進言

していたらどうなっていたでしょうか。もしそうなら、陸軍長官は戦争終結後に自ら国民になぜ原爆を使用しなかったかを説明しなければならないことになったでしょう。その際彼は、原爆があまりにも恐ろしく、非人間的で、今までの人類が知っている兵器の枠を越えていると、必ず説明したでしょう。核兵器は、化学兵器や細菌兵器と同じカテゴリーに属し、その使用を禁止すべきであること、そしてアメリカが使用しなかったのは、核の使用は許されないことであるからだとして陸軍長官は言ったことでしょう。もし、アメリカがあつた時そうしていれば、私の考えでは、戦後間もなく核兵器の製造が始まることはなかったと思います。また、ソ連が資金と能力と非常に限られた資源をつぎ込んでまで、アメリカが戦争中に使用を断念したであろう兵器の製造を戦後になって始めることもなかったと思います。言い換えれば、もしアメリカが核兵器を廃絶し、使用しないことにしていれば、今の世界はどれほど平和で安全なものだったかということです。しかし、現実にはそうはならなかったのです。広島と長崎に原爆が投下され、いまだに広島では、21世紀になっても、20世紀の後半と同様、二度と広島の悲劇が繰り返されないように叫び続けなければならないのです。また、広島と同様に他の核廃絶を求める組織の役割もますます重要度が増し、我々は「ノー・モア・ヒロシマ」と叫び続けなければなりません。

### 3. 中国から見た原爆投下の意義と戦争の記憶をめぐる中日関係

歩 平

中国・黒龍江省社会科学院副院長



中国・黒龍江省社会科学院副院長、教授。中国の文化大革命で1966年から約6年間（当時18～25歳）農村に下放された後、ハルビン師範大学歴史学部卒業。黒龍江省社会科学院歴史研究所所長、横浜市立大学および新潟大学の客員教授を経て、現職。専門は北東アジア国際関係史。遺棄毒ガス兵器問題専門家でもあり、共同研究のために来日した際には、毒ガス工場があった広島県の大久野島を視察した。主な著作に、『帝政ロシア黒龍江流域への侵略における編年』『東北国際約章』『日本の中国侵略と毒ガス兵器』などがある。

皆様、こんにちは。中国で一番寒い地域の黒龍江省からまいりました、歩平と申します。歩は歩くの歩、平は平和の平で、兵隊の兵ではありません。このたびで広島への訪問は4回目ですが、8月の平和の雰囲気を感じるのは初めてです。本日ここで報告できることをとても光栄に思います。

私が16年前の1986年に初めて日本に来たとき、東京、仙台、山形、新潟、金沢などの地域で、不思議な現象を見ました。各地の寺院や神社には、いずれも広島や長崎の原子爆弾の被爆を追悼する祭壇がありました。そのとき私は、二度の被爆だけがなぜ各地で追悼されるのかという疑問を持ちました。日本社会でも戦争の歴史を決して忘れてはいないのだということを確認しましたが、なぜ原爆が日本に投下されることになったかという戦争責任についての反省はなく、日本人が自分の被害ばかりを強調していると感じました。

私は、1994年に初めて広島の原爆資料館を見学しました。資料館の中で原子爆弾が投下されたときの光景を見て、絶対多数の被害者が直接戦争に参加していない女性や子供であったことを知りました。最も印象深かったのは、広島第二中学校の折免君<sup>おりめん</sup>が被爆した後の彼の弁当箱の中の黒焦げの食べ物でした。これらの遺物を見て、天真爛漫な子供たちが喜んで通学路を歩いていた様子を思い浮かべ、

その子供たちの苦痛の叫びを耳のそばで聞いたように思いました。小学校に入学したばかりの私の娘をも思い出しました。この女性や子供たちにどんな罪があるのでしょうか。彼らが受けた災難は、それほど重く厳しいものです。そのことから、日本人の被害の立場を理解できました。その後、原爆被害者を追悼する光景を寺院や神社で目にすると、自分も多くの日本人と同じように被爆者に手を合わせるようになりました。

もし日本に来る経験がなかったら、もし広島の原爆資料館を見学しなかったら、多くの日本人との交流がなかったら、日本国民の戦争の被害についての感情を理解することはできなかつたでしょう。同様に、多くの日本人は、中国における被害を深く理解することはできないし、中国人の戦争の被害者としての認識や感情がわからないのです。ですから、このたびのシンポジウムは大変有意義なものだと思います。中国、日本、韓国、アメリカの原爆についての認識の交流は、相互理解の基礎だと思います。

戦後、中国の原爆についての理論的な認識は、主に3つの時期に分かれます。1970年代以前、1980年代から1990年代中ごろ、そして1990年代中ごろ以後です。

これまでの原爆についての理論的な認識は、整理すると次の3点に要約されます。

第1点は、原爆投下が日本政府に多大なショックを与えたことは事実であり、したがって戦争の早期終結に役立ったという意義も否定することはできないという認識です。

第2点は、広島や長崎の原爆はアメリカが対ソ連の政治的な目的で投下したもので、アメリカにとって国際政治的に重要だったが、軍事的には重要でなかったという認識です。

第3点は、日本人は原爆を軍国主義の侵略戦争の責任とつなげて考えなければならない、日本以外の国家は原爆の悲惨さを考えなければならないという認識です。

以上は学者の立場での理論的な認識であり、民間の感情的な認識とは区別する必要があります。なぜなら、普通の市民は外国の資料を直接読むことはできないし、外国の方と直接交流する機会もあまりないので、戦争の被害者の立場で、自分の感情的な戦争の記憶だけで考えて原爆の意義を理解するからです。ここでは、感情的記憶としての「戦争の記憶」の影響が強く見受けられます。

中国人の戦争についてのイメージとして代表的な、感情的な戦争の記憶は何かというと、南京大虐殺、重慶大空襲、731細菌部隊、強制連行、従軍慰安婦などです。本日ご出席の方の中には、重慶大空襲と731部隊の中国の被害者もいますが、すべて中国人の被害、あるいは日本軍の加害に関することです。

その一方、中国人は日本の一般市民の戦争体験をあまり知りません。例えば、歴史学部を卒業した私でさえ、1980年代中ごろに日本に来る前は、沖縄作戦の集団自決のことを全く知りませんでした。中国人の戦争の記憶と比べると、日本人の感情的な戦争の記憶は全く違います。広島、長崎の原爆、沖縄戦、東京あるいは各地の大空襲など、そのすべては日本人の戦争被害的なことです。日本人は

中国人の戦争の記憶を理解する機会は少ないと思います。

もちろん、中国人の戦争の記憶も日本人の戦争の記憶も大部分が事実ですが、歴史の全部ではありません。感情的な歴史の記憶の特徴は、非理性です。例えば、中国人の感情的記憶においては、南京大虐殺の「30万人」という数字は戦争の残虐性のシンボルになりました。ですから、30万という数字には疑問を持っていません。逆に、大部分の日本人も「原爆」を批判することは平和運動のシンボルだと考えています。ですから、「正義の原爆」「解放の原爆」という認識もあまり理解できないでしょう。

私は、今までの歴史事実の認識をめぐる、中日間の交流はまだ不十分だと思います。これは学術研究の結論と民間認識の格差の重要な原因となっています。例えば、中国では原爆の被害の状況の詳しい説明が不十分であり、原爆についての感情的な知識もあまりありません。私が大学の授業で、学生たちに「原爆ドームは世界遺産です」と言うと、皆おかしいと言って笑いました。その後、被爆した広島の写真を学生に見せると、女性のやけどの傷跡や子供の黒焦げになった遺体を見て、皆大きなショックを受けました。彼らは、戦争時のアジアの数千万人の犠牲者の中に、300万人の日本の戦没者も存在することを理解したのです。このような知識を得ることにより、学生は自分の国家の感情的な歴史認識を持つだけでなく、相手の国家の一般市民の感情的な歴史の記憶をも理解することになります。こうした基礎によって、相互理解と歴史認識の共有は可能となるのです。

皆様ご存じのように、今年の国連本部会議場ロビーでの広島原爆展が中止されました。7年前のアメリカでの広島原爆展の計画と同じ



状況です。広島原爆展がなぜこうした困難に直面するのか、被爆の記憶の共有はなぜこんなに難しいのでしょうか。日本の戦争の歴史認識の現状を反省しなければならないと思います。5年前に前広島市長の平岡先生の本を読みましたが、先生は日本側の展示は戦争加害に対する認識が不十分であると主張されておりました。近ごろの「有事法制」「非核三原則見直し」などの問題の、負の影響もあるかもしれません。日本とアメリカの関係だけでなく、中日の間でも同じような問題があります。

皆様ご存じのように、人類社会はグローバル化に向かって発展していますが、国家はいずれにせよ存在しています。したがって、国家間の相互理解は平和の基礎だと思います。しかし、20世紀の戦争は日本と隣国の間では壁を作り、今でもその壁が存在しています。

私は、中国と日本の間の距離は「近い」のか、それとも「遠い」のかということを常に考えています。地理的な距離から言えば本当に近いといえます。しかし、中日両国民の心の距離から言えば、恐らくそれほど近い感じはしないだろうと思われます。

これは、どういう理由からなのでしょう。私は戦争の歴史に対する認識の相違に理由があるように思います。もちろん、国民レベルの「戦争の記憶」の交流は必要です。しかしそれ以上に、保守派政治家の固執した戦争の歴史観が原因になっているように思われます。

戦争の歴史に対する認識には、どのような相違が存在するのでしょうか。近年の自由主義史観と新しい歴史教科書は典型的な例として挙げられます。日本の自由主義史観の学者は、現代日本の社会問題に対する関心から、日本の若者が社会に対して責任を負うことを望んでいます。もちろん、この希望は当然の

ことだと思えます。しかし、この問題を解決するうえで、自由主義史観を採用するのではなく、逆に、戦時中の「神風」精神を提起して、民族主義、国家主義精神に満ちた「つくる会」の教科書を<sup>へんさん</sup>編纂するという方法を選びました。この教科書の民族主義の傾向は危険だと思えます。

それでは、どのような教科書を利用して若者を教育すべきでしょうか。どのようにしたら、我々は歴史観の共有を実現できるのでしょうか。私は歴史事実を究明し、「相互理解」を促進する教科書を作るべきだと考えます。

私は2000年に新潟大学で集中講義をしました。講義の際には、自分の「広島体験」などの「感情的記憶」を理性的認識に昇華して、歴史事実について写真とスライドやプロジェクターを使って説明しながら、日本人も被害者であるとともに加害者でもあるという認識を日本の学生に教えました。学生たちの反応は想像以上で、加害についてもより積極的に理解しようとしてました。これには私も感動しました。

「南京」は中国人の戦争のイメージですが、「ヒロシマ」は日本人の戦争のイメージです。中国人が戦争の残酷さを認識することにより「南京」から「ヒロシマ」へ、日本人が加害の責任を認識するためには「ヒロシマ」から「南京」へ、そのヒューマニズムの延長線が中国人にも日本人にも必要です。

歴史認識の共有、特に加害の歴史の事実を究明することは、日本と近隣各国との信頼関係を修復するためにも、日本の国際的な地位向上のためにも、重要なことだと思えます。

こうした平和構築のための取り組みの中で、平和と人道の21世紀に向けて、広島が果たす役割はとても重要だと思えます。

#### 4. 韓国における「ヒロシマ」の記憶、 韓日の和解に向けての努力

李 淑鍾

韓国・世宗研究所研究委員



韓国・世宗研究所研究委員。延世大学卒業、ハーバード大学で社会学博士号取得。専門は日本と韓国の比較研究、政治経済学、産業社会学、日本の選挙制度から市民社会の研究まで多岐にわたる。また韓国現代日本研究会において、機関誌「The Korean Journal of Japanese Studies」の編集責任者を務める。主な著書・論文に、「Japan's New Political Economy」(『日本の新しい政治経済』)、「Trust and Civic Participation in Korea」(『韓国における信頼と市民参加』)などがある。

本日は、このような会議に出席できますことを大変光栄に思います。私は韓国で、日本社会と日韓関係について研究しております関係で、年に一度か二度は東京を訪問しておりますが、広島を訪れたのは今回が初めてです。今回は、私の子供2人もつれて参りました。今朝は、子供たちを原爆資料館につれていきましたが、2人とも大変強い印象を受けたようです。今回の訪問は、非常に良い勉強になったと思います。

さて、私の報告の主題は、韓国の人々がどのような戦争の記憶を持ち、また、特に「ヒロシマ」に対してどのような思いを抱いているか、さらに、どのようにすれば「ヒロシマ」を韓日の和解のための架け橋にすることができるのか、また、北東アジアの平和構築の架け橋にするにはどうすれば良いのか、といった点です。韓国と日本の関係に関して、過去の歴史の話をするには常に非常に困難なことです。もし、韓国人、特に急進的な韓国人の過去の歴史に対する考えをお話すれば、きっと皆様は気を悪くされるでしょう。また一方で、もし私が日本の皆様の見方に同調し、祖国で日本の見方を説明したりすれば、日本寄りだとの誤解やそしりを韓国人の間で招きかねません。ですから、我々韓国人にとって歴史の話は大変難しいことなのです。しかしながら、私は両国のことを、また、両国の社

会を良く知っておりますので、バランスのとれたアプローチでお話したいと思います。

韓国と日本の間には相容れない記憶があるわけですが、「ヒロシマ」もそのような相容れない記憶の中に位置付けられているという点をまずお話したいと思います。戦争の記憶というものは、戦線や内地でのそれぞれの体験に基づく個人的なものもありますが、同時にまた、戦争に関する公的記憶というものも作られているわけです。公的記憶は、戦争を全く経験していない次の世代へと引き継がれていきます。日本の皆様が共通して持つ集団的記憶には、戦時下の欠乏、恐怖、パニックなどがあるでしょう。このような共通の記憶の他に、私の知る限りでは、政治的なイデオロギーによって異なる記憶を日本の皆様は持っていたらっしゃるように思います。リベラルな方が、戦争を自由と民主主義が抑圧されていた「暗い谷間の時代」と見なす一方で、ナショナリストの方々は、当時日本の国益を守るためには戦争以外の手段がなかったのだと言われます。このような相違はありますが、それでも日本の方々は皆、アメリカによる広島と長崎への原爆投下は人道に反することだと考えています。また、「ヒロシマ」を世界の平和と人道のシンボルにし、また、反核の拠点にしたいと願っております。

それに対し韓国では、戦争の記憶と「ヒロ

シマ」への思いが、日本の皆様とは非常に違っています。太平洋戦争に対する韓国の記憶は、当然のことながら、日本の植民地支配の記憶と結びつきます。その意味で、「ヒロシマ」への思いは記憶の片隅に追いやられているのが現実です。韓国では、政治的なイデオロギーを越えて、戦争の思い出が強固な集団的な記憶として昇華され、国民のアイデンティティーとも絡まっています。

多くの韓国・朝鮮人が徴兵され、戦死しましたが、彼らが命を犠牲にした戦争は日本の戦争であり、その日本とは祖国を奪い、韓国・朝鮮の人々を二級市民として苦しめた国です。ですから、この戦争は敵のための戦争であり、韓国・朝鮮人は日本が負けて、祖国が開放されることを望んでいました。ですから、広島への原爆投下は、当時も今も、多くの韓国人にとって、敵が行った戦争の一コマでしかなく、その中でも影が薄いものなのです。どちらかと言えば、韓国人は原爆に関して、アメリカ寄りの考えをしています。つまり、日本の皆様が原爆投下を絶対的な悪であると批判されるのに対して、韓国では正義が勝利するための手段であったと考える人が多いのです。もちろん、韓国人も日本の2都市が被った被害の甚大さを認識していますし、将来原爆を使用することには反対しています。

それでも、話がそこに及ばずすぐに、日本政府は広島・長崎で被災した韓国・朝鮮人の犠牲者や被爆者に対して公平な扱いをしていないといった方向に話題をもっていくでしょう。私を知る限りでは、原爆投下直後に約14万人の市民が広島で死亡しましたが、その中に約2万人の韓国・朝鮮人がいたはずですが、また、その後に原爆症によって死亡した韓国・朝鮮人もいます。合計で約4万人の韓国・朝鮮人が死亡し、3万人の被爆者が今でも、日本や

韓国で生きておりますが、この人たちには十分な治療が施されておられませんし、補償も十分ではないのです。

多くの韓国人が、過去の植民地支配に対する謝罪が不足していると日本を批判しています。また、特に中学校の歴史教科書に関する昨年の両国の論争に見られるように、日本が過去の歴史を歪曲している点でも、韓国人は日本を批判しています。ですから、日本が広島への原爆投下による悲劇を強調すればするほど、日本が犠牲者である点を強調し、日本の加害者としての側面を覆い隠そうとしているのではないかと、というように韓国人の目には映るのです。このように両国の戦争の記憶は相容れないものであり、和解は容易ではありません。

では次に、どのようにすれば、「ヒロシマ」をアジアにおける和解と平和の架け橋にできるかについて考えてみたいと思います。私を含め韓国と日本の多くの市民にとって、両国が過去の歴史について和解できていないという状況は非常に悲しいことです。両国の関係は、21世紀に入ってなお、過去に引きずられています。ご存じのように、両国は政治・経済の関係を強化してきましたし、文化交流や観光客の行き来も、最近、急速に盛んになりました。また、ワールドカップの共催によって、両国の友好と協力が強固なものになりました。両国政府は、自由貿易協定を結び、共同市場を開設することまで話し合っています。また、両国のオピニオンリーダーは、将来、東アジアの平和と繁栄を維持するためには、韓日の協力関係を深めることが必要だと強調しています。このような外交上の発展があるにもかかわらず、両国間には未だに歴史に根ざした相互不信があり、それが韓日関係に影を落としています。

1990年代半ばから終わり以降、韓国でも日本でも過去の歴史に関する議論がやかましくなってきたのは、興味をそそられる現象です。市民社会がこのような反応を示す一方で、両国政府は良好な関係を保っており、それ故にそれぞれの世論を健全で未来志向の関係へと導く努力をしなくてはなりません。

では次に、どのようにすれば歴史問題を解決できるかについて考えてみたいと思います。それは非常に難しい問題です。戦争の記憶を和解に結びつけることは果たして可能なのでしょうか。私は個人的には、大いに疑問をもっています。多くの韓国人が、和解ができず歴史の解釈が双方で食い違っているのは日本の方に責任があると考えています。また、日本が過去の歴史を心から懺悔<sup>ざんげ</sup>しない限り、日本政府が役人の「暴言」を効果的にコントロールし、右翼的な歴史教科書問題に決着をつけない限り、日本は決して隣国の人々、特に韓国人の心をつかむことはできないだろうと考えています。それに対して日本の方では、もうさんざん謝罪はした、そして右翼の問題は少数の人々の問題である、と言います。日本の保守派は、帝国主義的な過去の歴史を擁護し、正当化し、さらには韓国人の不平は聞き飽きたと言ったり、無視したりすることもあります。

一方で日本の若者の多くは、韓国人が今でも日本人に対して怒りを抱いていることさえ知らないようです。この50年間、日本人は韓国人に対して、また、韓国人は日本人に対して、自分たちの歴史認識が真実だと説得しようとしてきましたが、それは失敗でした。双方が互いに自分たちの戦争の記憶が正しいということを納得してもらうことができなかったのです。この半世紀の間に、双方が、事実を並べて説得することにも、倫理的に説得す

ることにも失敗したのです。そろそろ戦争の記憶について話し合う習慣を変える時期にきているのかもしれませんが。

私は、過去のこととて和解し、未来に向かう関係を構築したければ、双方が自分たちこそが犠牲者であったと言い合うのはやめた方がよいと思います。互いに和解できない戦争の記憶を持っているということを厳しい現実として受け止め、和解のプロセスを迂回して未来に続く道を探した方がよいのではないのでしょうか。両国の和解に障害となるものは、究極的には、それぞれのナショナリズムの中にあるのです。どの国の歴史にも愛国心を鼓舞し、国民としてのプライドを養うという隠れた主題があります。しかしながら、韓国と日本の両国の和解を進めるには、このようなナショナリズムから抜け出す努力が必要です。

その点、両国における若い世代は、ナショナリズムに隠されたこの主題を間違ったものと考えているようで、記憶の和解ができるチャンスがあるかもしれません。若者たちは、国家よりも個人主義、もしくはコスモポリタンのような、普遍的な価値を大切にしているようです。ですから、私は今の若者やそれに続く世代が和解のプロセスを歩んでくれることに期待しています。

このような和解のプロセスを考える時、私は広島が、ナショナリズムから抜け出すという点で重要な役割を担えるのではないかと思います。広島が今日まで掲げ続けている平和の価値は、誰も否定し得ないものだからです。韓国と日本の2つの市民社会は、「ヒロシマ」がシンボルとなる平和の規範を支持しなければなりません。そのためには、韓国人は日本にとって「ヒロシマ」がどのような意味を持つかを真剣に考える必要があるでしょう。それは、歴史問題に関する日本の態度を韓国人

がどれほど批判しているかに関わらず考えるべき問題です。

日本の方々の使命はさらに難しいものです。もし、日本人が広島にアジアの平和運動の先頭に立つことを求めるのであれば、ヨーロッパ人と比較してアジアの人々が広島に対して冷たい態度をとるのはなぜなのか、また時に批判的な態度をとるのはなぜなのか、ということを考えてみてほしいのです。日本がすべきことは、「ヒロシマ」の問題をアジアという環境の中で考えてみるということです。核兵器の使用、製造といった面で、日本はアメリカやヨーロッパ諸国のように手を汚していません。しかし、韓国や中国をはじめとするアジア諸国に対する侵略という負の遺産に、日本は向き合わなければなりません。日本が、慰安婦の問題や、国際的な人道主義に照らし合わせて、日本軍が行った他の残忍非道な行為と、「ヒロシマ」の問題を合わせて考えることができるようになったとき、広島は初めて、韓国を含めたアジアにおける平和と人道の拠点となることができるのです。

韓国人と日本人が共通の平和と人道的な価値のために連帯するとき、和解が困難な過去の記憶について争う必要はなくなります。そして、より良いアジアの未来のために、互いに真の友情を築き上げる方向に努力していくことができるでしょう。

これで私の報告を終わらせていただきます。ご静聴ありがとうございました。

## 5. 広島から見た被爆体験と 21世紀の広島役割

水本 和実  
広島平和研究所助教授



広島市立大学広島平和研究所助教授。東京大学法学部卒業、タフツ大学フレッチャ―法律外交大学院修士課程で法律外交修士号取得。朝日新聞社ロサンゼルス支局長を経て、1998年より現職。国際政治・国際関係論（核軍縮・安全保障）を専門とし、広島平和研究所「21世紀の核軍縮研究会」プロジェクトの運営に携わっており、その成果は『21世紀の核軍縮 - 広島からの発信』と題して出版された。他の主な著書・論文に、『なぜ核はなくなるのか - 核兵器と国際関係』（共著）『核軍縮における理想主義と現実主義 - 東京フォーラムの残した課題から』などがある。

広島平和研究所の水本と申します。

「広島から見た被爆体験と21世紀の広島役割」というタイトルで報告させていただきま  
す。広島という地域コミュニティで共有されて  
いる、明示的あるいは黙示的に隠れた形  
で共有されているであろう記憶というもの  
について、私なりにまとめて話したいと思  
います。もちろん、今日いらっしゃる方の中  
には、広島で被爆体験をお持ちの方も大勢  
いらっしゃるでしょうし、それぞれの方が  
それぞれの記憶をお持ちだと思います。そ  
うした方々のご意見は後半の質疑のセク  
ションで是非お伺いしたいと思います。

広島の被爆体験が持つ意味は、これまで  
様々に解釈されてきました。そして、例  
えば今日のシンポジウムでも、パネリス  
トの方々から広島における原爆投下の、  
広島における記憶とは異なる見方が示  
されました。

私は大学で学生たちに原爆や核兵器の  
問題を教えるときに、広島における被害  
の問題のほかに、アメリカがなぜ原爆開  
発を始め、いかなる経過で最終的に広  
島に投下されたのかという、今日、シャ  
ーウィン教授がご報告された内容とも重  
なるような話をしています。その過程  
で、誰が決断をして、どのように広島  
に原爆が投下されたのかという問題や、  
日本側にも早期に戦争を終結させたこ  
とで、結果的に原爆投下を防ぐ可能性  
はなかったのか

という問題にも触れています。また、中  
国や朝鮮半島における旧日本軍の行  
為、あるいは原爆投下と日本の敗北を  
中国や朝鮮半島の人たちがどう受け止  
めているのか、ということも教えてき  
ました。

こういった内容にしているのは、日本  
の若い世代がこれから国際社会の中  
で生きていくうえで、「広島」という視  
点や「日本」という視点だけでももの  
を見ていては判断を誤る可能性がある  
と思うからです。原爆投下の問題も、  
日本以外で様々な受け止め方があり、  
それにはそれなりの背景があるのだ  
ということを知らなければ、日本と  
国際社会との対話は始まらないと思  
っているからです。

しかし、今日はまず、そういう様  
々な解釈、あるいは様々な受け止め  
方を議論する前の出発点として踏  
まえておくべきことを話したいと思  
います。それは広島への原爆投下は  
「非戦闘員の大量無差別の殺傷」と  
いう、異なる解釈の余地のない非人  
道的な行為であるということです。も  
し、この原爆投下の本質を無視して、  
さまざまな解釈だけが一人歩きす  
れば、その議論は実は原爆投下のこ  
とを論じているのではなく、原爆投  
下問題にリンクさせて別の問題を主  
張しているのだと思います。そして  
その大半は、ナショナリズムに基づく  
主張、あるいは政治、イデオロギー  
と結びついた主張が多いと思いま  
す。

ナショナリズムや政治、イデオロギーと結びつけて原爆投下を語るのは、なにも海外の人たちだけではありません。日本国内においても、あるいは日本の平和運動の中においても、かつてそういう傾向があり、その結果、ときには運動が著しく歪められた苦々しい経験があったことを、私たちは忘れてはいけな

いと思います。そうしたナショナリズムや政治との結びつきをまず取り外したうえで、原爆投下の問題を考えた場合に大事なことがあります。それは、私たちが日常、「広島メッセージ」と呼んでいるものです。実はこの「広島メッセージ」あるいは「平和」という言葉も、広島では繰り返し使われてきましたが、その内容が本当に厳密に議論されてきたのかどうかについて、私は若干の疑問を持っています。多くの人がこうした言葉は明らかだと思っている反面、実際には何が本当に「広島メッセージ」なのかということについては、いつの間にか議論されていないのではないかと、時代とともにその言葉の中身を吟味しないで使ってきたのではないかと、という気がしました。

そのメッセージというのは、先程も申し上げた本質とつながることですが、「核兵器による非戦闘員の大量無差別の殺傷を二度と繰り返さないようにしよう」という単純明快なものだと思います。そして、このメッセージは、相手がどこの国の人であれ、良識のある人であれば十分理解できる内容だと思っています。

広島が戦後、繰り返し被爆体験を世界に語ってきたのは、悲惨な被爆体験の実相をできるだけ正確に多くの人に伝えることで、どこの国の人であれ、いかなる状況においてであれ、こうした核兵器による非戦闘員の無差別大量殺戮を繰り返さないでほしい、あるいは繰り返さないで踏みとどまることができるの

ではないか、という意味があったと思います。

そして、被爆者一人一人の原爆投下をめぐる記憶は様々であるかもしれませんが、被爆地広島全体のコミュニティとしての記憶の中では、恐らく原爆投下をめぐる憎しみや恨み、敵意といった側面は徐々に克服されて、むしろ純粋な平和への祈り、願いといった気持ちに収れんされてきたのだと思います。このプロセスがあったからこそ、現在の9.11テロ以降の国際情勢において現れてきた憎しみの連鎖を断ち切らなければならないと、声を上げた人が広島には大勢いるのではないのでしょうか。そういう主張が生まれるのも、広島がかつて憎しみや恨み、敵意といったものを克服してきたからだだと思います。

例えば、原爆を投下したアメリカに対して、もしナショナリズムの立場に立てば、著しい嫌悪感が満ちて、広島は反米の一大拠点となり得たかもしれません。ところが実際にはそうではありません。

一方、アジアの人たちや中国の人たちが広島平和記念資料館を見学したあとで、日本人は南京大虐殺をどう思っているのだ、と怒りに満ちた問いかけをすることがあります。それは今日、歩先生がおっしゃったことにもつながりますが、資料館の展示が日本人の被害のみを取り上げていることで、意図的に日本の侵略行為を無視しているのではないかと、という気持ちが恐らく背景にはあるのだと思います。

しかし、当然のことですが、平和記念資料館の展示の目的は、被爆の実相をできるだけ正確に伝えることであり、被爆を通して旧日本軍の行為を正当化しようとか、戦前の日本の政策を美化しようという意図は一切込められていないのは明らかです。にもかかわらず

そのように受け止める人がいるとしたら、受け止める側の人の気持ちによほど強いものがあるのだと思います。

それでは、単純で明快なはずの「広島メッセージ」が、なぜ時に相手に伝わらないのでしょうか。メッセージ自体が間違っているのでしょうか。私はそうではないと思います。しかし、伝わらないとしたら、相手の側に我々が知らなかった事情があるのだと思います。しかも、その事情というのは多くの場合、我々が単に知らなかったでは済まされない問題なのではないでしょうか。

今回、パネリストの方々からのお話で、そうした日本や広島における受け止め方とは異なる解釈や見方が示されました。それを大ざっぱに集約すると、次のように言えるかもしれません。つまり、日本が行ってきた植民地化、侵略、あるいは戦争行為の結果として、あるいはその延長として日米戦争が始まり、交戦国であるアメリカから戦争を終結させる目的で広島と長崎に原爆が投下された。そして戦争が終わった。こういう歴史の文脈の中に原爆の意味や意義を位置付けるべきだという見方です。そして、そこに政治、イデオロギー、あるいはナショナリズムという要素が入ると、この解釈はますます膨れ上がって、それぞれの要素によって解釈A、解釈B、解釈Cというように無限に増えていくかもしれません。

もちろん、広島市民もその他大勢の日本の市民と同じく、日本がかつて行ってきた植民地政策、侵略、あるいは非人道的な戦争行為という側面に厳しく目を向けるべきだと私は思います。それなくしては、これからの日本は国際社会の中で各国と協調して生きていくことはできないでしょう。その意味で、アジアの周辺国から日本の過去について厳しい目

を向けられていることに、私たちは敏感であるべきです。また、日本が行ってきた非人道的な行為によって悲惨な体験を強いられてきた人々に対して、広島はシンパシーを持つべきだと思います。

それと同時に、原爆投下に至るまでの日本の非人道的な行為の責任を、広島が背負わされた、あるいは広島が背負うべきだという議論は誤りだと思います。戦前までの広島が軍都だったから原爆が投下されたという議論があります。「因果応報論」とも呼ばれています。これも国家の戦争責任と被爆体験を短絡的に結びつけているものだと思います。広島が軍都となったのは地理的、戦略的な理由によるものであって、広島市民が皆、軍国主義者で戦争を煽ったから軍都になったのではありません。

このように見てくると、広島は実はいろいろなジレンマの中に置かれてきたのではないのでしょうか。つまり、被爆体験自体は非常に深刻で悲惨な苦痛であったにもかかわらず、原爆を通じてその帰結として日本が降伏をし、日本の降伏が平和をもたらし、人によっては軍国主義からの解放をもたらした。つまり、原爆が本来、被爆者の方々には非常にネガティブな結果を与えているにもかかわらず、歴史の流れの中では一定のポジティブな役割を果たしたのかもしれないという見方が、日本の国内にもどこかに存在しています。

例えば、広島は戦後一貫して核廃絶を主張してきたと言われていますが、実は最初の10年間は、ほとんどの被爆者は沈黙を余儀なくされていたのだらうと私は思います。国内でも光が当たらず、救済措置もまだなく、例えば結婚差別や就職差別、医療上の不安、その他を抱えて、経済的にも苦しんだ方が非常に多くいらっしゃると思います。そういう苦し



みを強いられたにもかかわらず、そういう経験とそこに至った理由を、それぞれの方が合理的に納得する形で整理することが恐らくできなかったのではないかと思います。つまり、敗戦、降伏、戦後の平和という流れの中で、なぜこのような犠牲を強いられたのかということに対して、人間はそれぞれの自分の気持ちのうえで、どこかに納得できる要素がなければ、最後までそのトラウマに苦しめられるのではないかと思います。

21世紀の世界において、広島は引き続き核兵器使用の非人道性を訴え続けるべきであろうし、その意味で広島の役割は変わらないと思います。しかし、21世紀の紛争・対立の問題は、50年前の世界の紛争・対立とは全く構造が変わってきています。そして、今の国際社会の中における紛争・対立の渦中でも、やはり悲惨な体験を強いられている人々が大勢います。

これからの広島は、同じような悲惨な体験をした人たちに対して、限りなくシンパシーを持つべきではないでしょうか。あるいは、そのための救済の手を差し伸べる場所であってほしいと思います。広島の人々が被爆体験を世界中の人々に聞いてほしいと思うように、自分たちの悲惨な体験を聞いてほしいと思っている人たちは、世界中にいるはずで、そして、その声に我々が耳を傾けない限り、彼らもまた広島に耳を傾けてくれないのではないのでしょうか。お互いに耳を傾け合うことが、今、最も大事だと私は思います。

---

## パネルディスカッションおよび会場との質疑応答

---

### 藤原

パネリストの皆様、ありがとうございます。先生方のお話を伺ったところで注意しておきたい重要なことは、外国の人は広島に関心がないとか、関心がないどころか広島に原爆が投下されても仕方がないと思っていると決めつけていいのかといえば、それは恐らくそうではないということです。そうではなく、やはり知らない、知らされていないということが第一にあり、そして、広島の実験が伝えられることによって、それを見る目が変わることが間違いなくあります。

もう1つは、日本が自分の加害行為に向かい合おうとしないときに、なぜ広島の実験者を語らなければならないのかという問題があります。広島の人たちは、世界へのメッセージといいながら、自分たちの仲間が死んだことばかり話しているのではないかと、そして、外の人から見れば、我々の死者には目を向けていないのではないかと怒りにもなるわけです。

しかし、無差別の大量殺戮は、日本がされたことであると同時に、日本が外に対してしたことでもあるのです。双方ともが戦争の被害者であるというように我々が主張しようとするのであれば、日本国内ばかりではなく、当然のことながら日本国外の無差別の大量殺戮に目を向ける必要があります。それが日本軍の行動によるものであるとすれば、なおさ

らのことではないかと思えます。

それでは、これからディスカッションに移りたいと思いますが、その前にまず、各パネリストの皆様にご自分の報告に付け加えたい点、コメントをお伺いします。それでは、水本さんから順番にお話しただけですか。

### 水本

他の3人のパネリストの方々のお話を伺って、日本と異なる視点からの報告をいただいているにもかかわらず、予想したよりも、広島の実験ということに対して非常にポジティブに受け止めていらっしたり、あるいは核兵器に対してはきちんと問題を理解していらっしやる、その2点についてはほとんど共通認識があるのではないかと思いました。もちろん、3人の方々も人格的にも非常に穏健で、一緒に考えようというメンタリティをお持ちの方々だからだと思います。

そういう意味では、むしろこれからは、もう少し日本と違う見方を率直にお話いただいて、それに対して例えば来場者から、そうではないのでは、という意見があってもいいという感想を持っております。

是非引き続きフランクに、個人的なご意見ではなく、皆様の国ではこのような見方があるのだということを、もう少しここで示していただくことが、広島のコミュニティにと

って大事なことだと思います。

### 李

これは、質問でもコメントでもないのですが、私が考えていること、そして皆様にも考えていただきたいことを話したいと思います。つまり、私は、どうして広島の問題を日本人や韓国人にとっての太平洋戦争の記憶と結びつけるのか、疑問に思っています。私自身は、広島は太平洋戦争の記憶とは全く別のもののような気がしますし、また、区別すべき問題であると思います。広島の問題には、ある意味でユニバーサルな要素があり、また、広島は世界で初めて原爆の被害を受けた都市であり、そして最後であってほしいという点では、ユニークだとも思います。また、人権や人道といったユニバーサルな価値にも広島の問題は結びついています。それらは、論議の多い戦争の記憶とは別個に扱うべき問題ではないでしょうか。戦争の記憶について言えば、たった今、皆様がお聞きになったとおり、韓国人の記憶、中国人の記憶、アメリカ人の記憶はそれぞれ異なります。戦争については、このように地域地域の異なる見方があるのですが、広島はそれらとは切り離して、どの国の人も共有できるものでなければなりません。戦争そのものの記憶については論争を続けながらも、広島に関する重要な、普遍的な価値を共有することができるはずで、その点、海外、特にアジア諸国で広島が教えられていないことは、大変残念なことです。それは、広島が戦争の記憶の中に埋没しているからではないでしょうか。韓国人が広島の意義をあまり知らないのも、一般的な戦争の記憶の中に広島が埋没しているからでしょう。しかし、私はそれは間違っていると思います。では、どのようにすれば、

このような普遍的な価値を多くの人々の問題として提起していけるのでしょうか。それが今後の課題になると思います。

### 歩

私は原爆について、常に2つの立場で考えています。1つは戦争責任とつながる政治的な立場、もう1つは人道的な立場です。これは人間性と人権の問題とつながっています。この2つの問題はつながっていますから、矛盾もあります。どういう形で認識すればいいのか今、悩んでいます。

例えば、広島に来ると、とても平和な雰囲気があり、原爆についての認識も強い。しかし、広島以外の日本各地の都市では、それがあまり強くない。中国でもまだありません。皆が広島は被爆の状況をよく理解すればいいのですが、中国では戦争の責任の問題とつながっていますから、政治家が戦争責任を認めない言葉を出せば、あまり理解されないという問題があります。

もう1つは、実は中国人も広島は被爆の問題に関心を示します。私は小学校時代、広島は原爆の写真集を見ました。見ましたが、中国ではそのことに関心を有する環境がないのです。広島だったら慰霊碑がたくさんあります。広島市長に伺ったら、大体500ぐらいの慰霊碑があるそうです。しかし、中国にはそのようなものはありません。逆に、中国には、中国人の戦争被害者のための記念碑がたくさんありますが、日本人は全く知りません。ですから、これが最も重要だと思います。

### シャーウィン

私の個人的な体験について少しばかりお話しさせていただきたいと思います。私は歴史について研究し、出版もしているので、歴史

の話をするのが使命だと考えています。私は広島とは、非常に長期にわたる縁があるので。最初に広島を訪問したのは1961年の春で、アメリカ海軍の若き士官として岩国に駐屯しました。その時、核兵器がもたらした結果を実際に見聞きし、心の奥底を揺るがすような強い衝撃を受けました。その時の経験が、その後私が海軍を退役し、大学院で研究を始めた際に強い影響力を持ったと思います。その後、1980年代半ばから、恐らく4~5回広島に戻ってきております。そのたびに、広島の市民や組織による重要な活動が進展していく様子を見、私は深い感銘を覚えました。原爆資料館には、広島に来るたびに訪問していますが、そのたびに变化する展示には感銘を受けました。今朝、新しい祈念館を訪れましたが、そこは、技術を駆使した建造物であるだけでなく、個人的なモニュメントでもあり同時に、広島の歴史を刻む重要な資料庫でもあります。最後に、秋葉市長が今までされてきた仕事、およびすべての関連する活動に対して秋葉市長が差し伸べられてきたエネルギーと支援に深い感銘と感謝を覚えました。

#### 藤原

ありがとうございました。それでは、ディスカッションの時間に入りたいと思います。来場者の皆様から拳手をいただいて、それを様々な形で議論したいと思います。

#### 来場者

マーティン・シャーウィン先生に質問します。

アメリカの文化として「やられたらやり返す」、リベンジというカリタリエーション（報復）という観念があるのでしょうか。「リメンバー・パールハーバー」というのは、どうも

報復の様相が響くのです。広島あるいは長崎では、「リメンバー・ヒロシマ」とか「リメンバー・ナガサキ」という言い方ではなく、「ノーモア・ヒロシマ」「ノーモア・ナガサキ」という言い方をします。そこには、リベンジというものはあまり感じられないように思うのです。その辺を先生はどのようにお考えになっ  
ていらっしゃるのでしょうか。

恐らく、68か69の日本の都市がアメリカの爆撃でかなり壊滅しました。これは、パールハーバーに対するリベンジではないのでしょうか。原爆の場合には、いろいろ他の要素があるかもしれません。それから、今回のワールドトレードセンターの場合も、やはりリタリエーション（報復）ということでアメリカ国民の圧倒的な支持があります。そういう点が、アメリカのカルチャーの中にあるのかどうか、教えていただければと思います。

#### シャーウィン

良い質問をありがとうございます。それは、一方で人間性に対する質問であり、また、もう一方ではアメリカの文化や風土に関する質問ですね。誰でも攻撃を受ければ、特に自分たちの観点から見てアンフェアな攻撃を受けた場合、報復する傾向があると思います。そのような傾向は、確かにアメリカにあります。この点に関しては、私にとっては祖国であります。アメリカのやり方を疑問に思っています。その一方で、アメリカには非常に寛大な面もあると思います。例えば、こんな逸話があります。昔、イスラエルにゴルダ・メイヤーという女性の首相がいたのですが、そのメイヤー首相がアメリカを攻撃しようと言ひ出します。驚いた側近が、「気でも狂ったのですか。アメリカに戦争をしかけたら、負けますよ」と言います。メイヤー首相は、「そこが

ポイントなのです。負けたらすぐに、アメリカは資金援助をしてくれるでしょう。すぐに復興を手伝って、支援してくれるはずですよ」と言ったそうです。もちろんこれはジョークですが、アメリカは勝利を収めたとたんに敵に寛大になることがありました。しかし、敵である限りは、いつも寛大であるとは限りません。アメリカの側面をお分かりいただけでしょうか。幸いアメリカは民主主義の国で、市民はもっと平和的な政策をとってほしいとか、寛容な外交政策をとるべきだとか、発言することができます。いつも思い通りになるとは限りませんが、それでも政府を批判し、発言するチャンスだけはあります。

#### 来場者

正式には秋に発表するそうですが、ブッシュ政権が核の見直し政策を発表しました。現在、アメリカはアフガニスタンに対する戦争を続行しております。テロに対する報復ということで始めた戦争ですが、すでに1万人以上の人たちがアフガニスタンで殺されています。この戦争をイラクに対する戦争に広げて、さらに北朝鮮、イランを悪の枢軸と決めつけ、それらを叩きつぶすためには核の使用も今後は政策として考えると、公然と表明しています。そして、先制攻撃も行うということ、ことさらに核戦略ドクトリンという形で表明しています。

こういう状況では、これまでのように核がいつか使われるかもしれないという問題ではなく、イラクの戦争に対して使われる可能性が非常に高まっています。小泉首相が今国会で通そうとして失敗に終わった有事法制がもし通ると、沖縄がアメリカの核軍事攻撃に際して使われる可能性が強いわけです。

戦後、アメリカが核使用を何度も試みまし

たが、まさに広島が、二度と起こしてはならないということで阻止してきたと、私は理解しています。そういう意味では、広島・長崎の被爆者の怒りと悲しみと闘いというものが、世界中の人たちの心をつかみ、共有する意識として核の使用を防いできました。

ところが、いよいよアメリカが核戦略によってそれを吹き飛ばして、日米が侵略戦争に打って出るということが今回、公然と表明されています。そういう状況の中で、どうしたらこういう問題に対して立ち向かえるのかということ、私も考えたいと思って広島に来ました。多くの人たちと議論したいと思っていたところ、このような貴重なシンポジウムがあったので、飛び入りで入らせていただきました。もしご意見が伺えれば非常に幸いです。

#### 藤原

この質問に正當に答えるべき方が恐らく他にいるかもしれませんが、その資格があるかは別問題として、私がお答えしたいと思います。

1つは、核が使用される可能性が高まっているというのは、非常に残念なことです。現実にもそのとおりです。現在、アメリカが核兵器を使用した場合に、報復する可能性があるのは、核保有国が自国を攻撃された場合にほぼ限られていると言っていいでしょう。つまり、第三国のために核の傘を提供しようと考えたアメリカ以外の核戦力は、現在存在しません。ということは、非核保有国に対してアメリカが核戦力を使用した場合には、アメリカに対する報復は事実上存在しないということになります。

2つ目の問題は、それとつながることですが、アメリカは現在、他の国と連合を組まなくて

も、同盟軍に頼ることなしに単独で戦争に勝つ力を備えています。実はこれは、日米安保と別の意味で非常に危険なことです。つまり、日本が協力しなくても、イギリスが協力しなくても、イラクでアメリカは勝つことができます。そうなりますと、国際連合や国際的な枠組み、あるいは同盟国の意見さえ無視した行動が、軍事的には可能になってしまうという状況があります。

ただ、そうは言いながらも核兵器がこれまで使われたことがないのは、平和運動の意義ばかりでなく、いろいろな要素が働いていて、それらは無視すべき要素ではありません。アメリカ政府の中に核兵器を使える兵器に位置付けようという要素があるのは事実ですが、政府内でもそれを押さえようとする要素はあります。まだ決して結論が出たわけではありません。

ですから、そのような状況になる可能性は十分にありますが、もう使われるに決まっている、とあきらめる必要はないという状況にあるのではないかと思います。

### 水本

広島や長崎の被爆者の方々はこれまで体を張って運動しこられました。しかし、いつまでも何かあると被爆者の方々に声を上げてくれという形の考え方ではいけないのではないのでしょうか。つまり、誰もが自分の平和を求める権利があり、また逆に責任があるわけですから、若い世代の人であれ広島以外の人であれ、同じ考えを持つ人が共有して考えればいいし、行動するべきだと思います。

では、次にどうするかということです。例えば、日本が一国で非核主義を貫ける、それによって世界を非核化できるという可能性は、ますます減ってきているのではないかと思います。

ます。また、今の藤原先生のお話にあったように、アメリカが単独でもやりたいことをやるという場合に、日本は国際協調を重視してあらゆる国と手を組んで、アメリカに立ち向かうしかないのではないのでしょうか。

NPT（核拡散防止条約）は180数か国が締約していますが、例えば「アメリカ問題を考えるフォーラム」というのをアメリカ抜きのいろいろな国で、と半分冗談で研究者の人と話したことがあります。特に核問題を中心にアメリカ問題を考えるフォーラムを働きかけて作っていくことも必要ではないかと思いません。そのときには、今日来られているパネリストの方々の、それぞれの国の人の知恵も必要でしょう。いろいろな形で網の目を広げていくことが必要だと思います。

### 来場者

私は重慶からまいりました。今回、8月6日の集会に参加する予定です。

このシンポジウムに参加した感想を述べさせていただきます。答えは望んでいませんが、私の話が皆様のご参考になればと思います。

私は1935年に東京で生まれました。父親は日本へ養子に来ていたのですが、1937年に戦争が始まり、翌年、両親は私を連れて重慶に戻りました。私の戦争の記憶は、日本軍の重慶に対する爆撃や毒ガス攻撃でした。6年間に及ぶ日本軍の爆撃によって、重慶の周りの地域を含めて、約3万人もの被害者が出ました。ですから、私は日本に原爆が投下されたことを聞き、子供心に本当に嬉しかったのです。やっと中国より強い国が、日本にもっと大きな爆弾を落として、それで日本が負けたのだ、と。しかし、広島に落とされた原爆は、10万人以上も殺害した恐ろしい兵器であることもよく理解しています。

私は大人になって学者、作家になり、国や民族の運命、また人類の運命を考えるようになりました。国や民族だけではどうしても限界がありますから、我々は人類のメンバーのひとりとして、人類の運命を共同で考えなければならないと思います。我々にあまり力はありませんが、広島のような惨劇が再び起こることは止めなければならないと思います。

#### 来場者

これは意見ではなく、パネリストの方のご発言の内容を確認したいのですが、無差別的な市民の大量殺戮、戦闘員や戦闘に関係している人たちではなく、市民を巻き込んだ大量殺戮は、戦争状態下でも異例なことで許されないという主旨のことを話されたと思うのですが、これまでの戦争でもこれは本当に異例なことと考えられるでしょうか。

#### 水本

そういうことが繰り返して行われてきたけれども、大量無差別に非戦闘員を殺すのはいけないという考え方が基本にあるべきで、実際に広島・長崎の原爆以外になかったかという話は別で、あちこちでありました。それも含めて無差別に大量に非戦闘員を殺すのはいけないという考え方を国際社会に定着させるべきであるし、現に定着しつつあり、そこを省いてはならないというのが私の主旨です。

#### 藤原

ここで、一言差し挟ませていただきますと、大量無差別殺戮そのものが拡大するのは、やはり第二次世界大戦です。第一次世界大戦にも、限定的にはあれ現れていますが、第二次世界大戦で特に飛行機から爆弾を落とすことが可能になることで、飛躍的に大量無差別

殺戮が可能となります。中心は戦略爆撃で、先程、重慶爆撃のお話がありましたが、アメリカが広島・長崎を攻撃する以前に、ドイツのロンドン空襲、日本も重慶の空爆をしています。また、アメリカは広島に原爆を落とす前に、東京、横浜、阪神で大規模な空襲をしていて、これは無差別殺戮になります。

これらは伝統的な戦時国際法で明らかに違法化されていたものですが、それを肯定するような方向にだんだん動いてしまったわけです。そして、例えば戦略爆撃の違法化は現在ではまだ完成していません。残念なことですが、それが現状です。

#### 来場者

日本人も外国人の方々も、戦争あるいは原爆投下についての記憶を交換しながら理解を深めていくことは大事なことです。それは現在の平和をより確かなものにしていく、また、より強固な世界の平和をつくり上げていく、という私どもの当然の願望と結びつけて、具体的な手だてを私どもが考え、またその方向に従って行動していくことへとつなげることで意味を持ってくる、と私は考えます。

その場合に大事なことは、第二次世界大戦後、半世紀以上の時間が経過していますが、その間に大きく変わった現実を踏まえて考えていかなければならないのではないかという気がします。一番大きな変化は、やはりソビエトが崩壊したことです。私が昭和30年(1955年)に広島大学に入学したころは、到底そのようなことは想像もできませんでした。しかし現実には、ソビエト体制は今から10年ぐらい前に崩壊して、それによって東西両陣営の、アメリカとソビエトとの全面核戦争という危険にさらされていた世界は、少なくともそういうことから解放されました。しかし、

また新たな危険も生じています。国際テロリズムが起こってきていることも、その中の1つです。ですから、私たちはそういう大きな変化の中で、その変化に対応しながら過去の記憶を生かし、交換しながら、より確かな平和を築いていかなければならないのではないのでしょうか。

その場合に、中国との関係で言えば、本当の日中友好協力関係が現在あるといえるのでしょうか。例えば、靖国神社の参拝で常に中国からはいろいろな批判が出てきています。一方で、そういうことばかりが前へ出て、中国の軍拡問題や台湾に対する武力解放政策の完全放棄という問題が薄れていて、本当の日中対話が行われていないように思われます。

過去の日本軍国主義のイメージを想像させるような、あるいはその残りかすとも受け取られかねないようなこととはきっぱりと縁を切るとともに、やはり双方が現実を見て未来へ向かって、本当の対話を開始していくことが必要ではないかと私は思います。

#### 来場者

シャーウィン先生に2つと、歩先生と李先生に共通して1つ、質問させていただきたいと思います。

シャーウィン先生にですが、今日、ここが広島ということで、長崎のお話はあまり出なかったのですが、広島への原爆投下と長崎への原爆投下の意味の違いがあるのか。どのように広島と長崎を統一的に、あるいは個別的に把握したらいいのか、ということが第1点です。

もう1つは、ルーズベルトの負の遺産があって、トルーマンには原爆投下以外の選択肢はあまりなかったという評価もあると思います。今日のお話では、トルーマンにも強い意志

があれば、側近の言いなりにならず、原爆投下を拒否することも可能であったというようにも受け取れたのですが、その問題はどうかという点です。

また、歩先生、李先生につきましては、共通の歴史像（原爆像・戦争像）の重要性と、それを共有することの難しさを指摘していただきましたし、そのとおりだと思います。日本とアメリカ、アジアばかりでなく、日本国内においても、政府、研究者、民衆、あるいは民衆の中にも被爆者と非被爆者の間に大きな認識のギャップがあるのが現実です。

こうしたギャップを埋めていく方法として、被爆体験の思想化を考える場合に、外国人被爆者の問題と日本の戦争責任という視点を入れて、原爆と戦争を総合的に考えるべきだということです。

日本にあの当時いて、5万人ともいわれる犠牲になった中国や朝鮮の方々の問題を、どのように位置付けるかを、お2人の先生にお聞きしたいと思います。

#### シャーウィン

簡単にポイントだけをかいつまんでお答えします。原爆投下は不必要でした。どちらのケースも、1945年8月に戦争を終結させるためには、不要なことでした。トルーマン政権にもそのように考える人がいたのです。彼らはそのように進言しましたが、受け入れられませんでした。ですから、今の質問への回答は、イエスです。トルーマン大統領は、原爆を投下しないという決断をすることもできたわけですから。そして、その場合でも、戦争が終結した時期は、あまり変わらなかったと私は思います。



## 歩

認識の共有の問題は、確かに難しい問題です。自分の国の中にも様々な考え方がありますし、それ以外の国の人々の様々な立場もあります。被害国と加害国の立場は全然違いますから、歴史像の共有は難しいです。ですが、共同で取り組む努力が必要です。

今はグローバル化の社会ですから、これはお互いに一番重要です。中でも、学者の責任が一番重いと考えます。私の家があるハルピンは、日本の新潟と姉妹都市です。新潟大学の古厩先生は、一生懸命にその問題に取り組んで、北東アジアの歴史像の共有についてのシンポジウムを毎年開催し、中国・韓国・ロシアの学者を集めて討論しています。今年で3回目ですから、多くの人々が参加し、相手の考え方をだんだん理解するようになりました。これは今日のシンポジウムと同じように、いい試みの1つだと思います。

## 李

広島と長崎の原爆についての記憶が異なるというのは、歩平教授へのご質問だと思いますが、私から韓国の場合について申し上げます。韓国人は日本の2都市に原爆が投下されたという事実は知っています。しかし、なぜ広島だけが話題になって、長崎が沈黙しているのか理解できずにいます。日本人が広島ばかりを政治問題にし、長崎を無視するには、何か国内の政治上の理由があるのでしょうか。長崎のことを私はよく知らないのですが、この問題への解答は、韓国や中国ではなくて、日本の方に聞いた方が良さそうですね。これは、非常に異なった見方ですから。

次に第2の質問についてですが、私も全く同感です。日本は、広島の場合を持ち出すなら、自らの戦争責任を受け入れるべきでしょう。

広島犠牲に対するアメリカの責任について語るなら、日本の戦争責任についても受け入れるべきだと思います。非常に、ねじれた、矛盾した状況ではありますが。例えば、私は広島で被爆し亡くなった韓国・朝鮮人の記念碑に行きましたし、原爆資料館も見学しました。アメリカの原爆投下による犠牲者や悲劇的な出来事の展示を見たわけですが。驚いたことに、当時、広島市の人口の7分の1は韓国・朝鮮人の労働者でした。ここには軍需工場が多かったからなのか私には分かりませんが、広島は、他の日本の都市と比較して、極端に韓国・朝鮮人の割合が高かったのです。彼らは日本に徴用されてきた労働者たちで、その大多数は投票権を持たず、しかもここで死んでいきました。アメリカの原爆で彼らは殺されました。しかし、そのアメリカが祖国を開放してくれました。それでも、韓国人の死者はきちっとカウントされていないし、資料館にも展示されていません。もし、広島市民の犠牲者だけを問題にしているのなら、それはローカルな問題になり、広島への原爆投下の意味は矮小化されるでしょう。ですから、「ヒロシマ」の意義を世界に訴えたいのであれば、もっとユニバーサルな人権の問題にしなければなりません。そうすれば、韓国・朝鮮人の犠牲者もきちんとカウントされるでしょう。そういう意味で、皆様は原爆を投下したアメリカの犠牲者でありながら、韓国人に犠牲を強いた迫害者でもあるという、複雑な構図に対してもっと正直になってほしいと思います。そうすることで初めて、原爆の問題を人間性に対する問題として、世界に訴える倫理的な正当性が得られるのではないのでしょうか。

## 来場者

今日の各パネリストの、非常に広い基盤に

立って、「ヒロシマ」あるいは原爆ということ  
を理解されている話を聞きまして、非常に感  
動しております。

ただ、我々核戦争防止国際医師会議には、  
北アジア地域として日本・南北朝鮮・中国が  
加盟しているのですが、今日のシンポジウム  
に、もし北朝鮮の代表の方が来られていたら、  
また違った見方のディスカッションもできた  
のではないかと思います。

韓国の方もおっしゃいましたが、5～6万の  
朝鮮半島の方が広島・長崎で被爆され、今、  
北朝鮮にも約1500～2000人におよぶ被爆  
者がおられるということで、日本政府が最近  
出した在外被爆者の援護問題にも関連して、  
ぜひ我々のできることはしたいと思います。  
しかし、ご存じのように、北朝鮮と日本の関  
係は非常に複雑で、まだ交渉が始まるという  
段階ですから、なかなか難しい問題だと思  
います。

北朝鮮と日本の関係、あるいは朝鮮半島の  
安定の問題は、北東アジアの共存・共栄と  
って欠くべからざる要素だと思います。もし  
今日のパネリストの中で、これに関して何か  
ご意見をお持ちの方がおられましたら、お伺  
いしたいと思います。

#### 李

実際多くの韓国人が、日本と北朝鮮との国  
交正常化によって、朝鮮半島がもっと安定す  
るであろうと考えています。特に現在の金大  
中政権は、そのような正常化の進展を望んで  
います。また、金大統領は小泉内閣が動き出  
し、交渉を始めるように後押ししています。  
しかし、日朝会談はうまくいかず、手詰まり  
状態にあるようです。その大きな理由は、ブ  
ッシュ政権の出方にあるのではないでしょ  
うか。ご存じのように、ブッシュ政権は北朝鮮

を非常に危険な国だと考え、悪の枢軸の1つで  
あるとまで言っています。これは多くの韓国  
人の見方ですが、残念なことに、日本と北朝  
鮮との関係、さらに韓日関係も日本とアメリ  
カの関係の影響を受けることになります。も  
し、アメリカが北朝鮮と良好な関係を結べば、  
日本も後を追うであろうと思います。日本に  
は、北朝鮮政策でもっとアメリカから独立し  
たアプローチをとってほしいと思いますが、  
残念ながら、現状では日本の政策はアメリカ  
の政策に影響されるでしょう。

#### シャーウィン

ブッシュ政権について、また、戦争とテロ  
についてコメントしたいと思います。世界全  
体では非常に危険な方向に向かっていると  
思います。昨年の9.11同時多発テロが犯罪行為  
であったことに疑問の余地はありません。テ  
ロは、恐ろしく、あらゆる面から見て非人道  
的で、テロに関わった人々を探し出して裁判  
にかけるべきです。しかし、テロリストに対  
する戦争へこの問題をエスカレートさせる  
ことは、民主的な制度を築く手助けにはなら  
ないでしょう。長期的に見れば、アメリカの  
民主主義にも外交政策にもプラスにはなりま  
せん。しかし、残念なことに、ブッシュ政権  
は次の選挙にはプラスになると考えているよ  
うです。私としては、アメリカの同盟国がこ  
のような手に負えない政策に抵抗するだけの  
力を持ってくれることを期待するほかありま  
せん。冷戦時代に共産主義に対する戦いのた  
めの同盟が結ばれましたが、今、ブッシュ政  
権がやろうとしていることは、「テロに対する  
戦い」のための同盟を結ぶという、冷戦時の  
思考です。ブッシュ政権が朝鮮半島にある素  
晴らしい機会を、偏狭な国益追求のためにみ  
すみす失いつつあるという指摘は、今日の話

し合いで2度目の発言です。先ほど、どなたかが国連での展示がキャンセルされたとおっしゃっていましたが、それはブッシュ政権からの圧力が原因であることは明らかです。

#### 来場者

水本先生に、負の遺産についてお尋ねします。私の知る限りでは、現在、負の遺産というのは広島にある原爆ドームとポーランドの Ауシュビッツ捕虜収容所で、3つ目がないように思います。例えば、第二次世界大戦で約2000万人の犠牲者が出たといわれていますし、特に日本が侵略して、中国で南京大虐殺という大変なことをやっています。それが負の遺産にあたるかどうかは別にして、現在、そういったものを残そうという世界的な動きはあるのでしょうか。

#### 水本

負の遺産をきちんと残しておこうとか、後世に伝えようという動きがあるかどうかということ言えば、今おっしゃった南京にも博物館がありますし、それぞれの民族が何らかの形で負の遺産を継承しようとする動きは、実は世界中で様々な場所にあると思います。例えばカンボジアに行けば、ポル・ポト派による虐殺を伝えている、通称「キリングフィールド」と呼ばれているところがあり、建物の中に頭蓋骨を積み上げて展示しています。アメリカの南部に行けば、ヒューマンライフミュージアムという、黒人奴隷制の時代のことをずっと伝えているものもあります。もちろん、ホロコーストミュージアムというのが、アウシュビッツ以外にも多数あります。

すべてをお答えできませんが、アウシュビッツ、広島に限らず、それぞれの国、それぞれの民族の中にあると思います。

#### 来場者

1987年に留学生として日本に来て、今、細菌戦の被害者の遺族として東京地方裁判所で裁判をしています。先程、先生方や会場の皆様のお話を伺って、自分の感想を含めた話をしたいと思います。

私は1950年代に生まれましたので、子供の頃から原爆のことを教えられました。ドキュメンタリーでも見たことがありますし、非常に恐ろしい兵器だということはわかっています。ですから、戦時中に中国人が日本軍にいくら暴行されたことがあったとしても、原爆に対しては何も言えません。これはやはり、被害者の生命に対する尊重の気持ちだと思います。被害を受けた人は、そういう気持ちを持ちます。

例えば、日本では20万人の犠牲者が出たといわれていますが、最近『ジャパン・タイムズ』で50万人の被害者が出たという記事を読みました。しかし、中国の学者も一般の人も、被害者の数字に関しては、どのような研究の手段で、どのようにデータが作られたか、誰も何も言いません。世の中では議論にならないのです。

もちろん、日本の人々の評判もありますし、信頼もありますが、一番根底にあるのは生命に対する尊重だと思います。被害者の数字に関してのみ議論することは、人間の尊厳を失うことになるのではないのでしょうか。

しかし、中国はもちろん発展途上国として現在も実証・研究が全く足りません。基礎研究も足りませんし、それは中国人としてよく理解しています。

南京大虐殺の30万人の被害者の名簿を出してほしいという話を、よく日本側の一部の人はおっしゃいますが、どうしても出せない事情があるのです。中国では1930年代の初め

ごろに初めて、重量や長さなどのメジャーメントが統一されました。ですから、当時は数字で管理された国とは言えませんでした。今でもそのことは中国人として恥かしく思います。被害者の正確な名簿を作らなくてはならないと思います。しかし、あまりにも数字にこだわって議論することは、私はいいことだとは思いません。死んだ人の命が単なる数字として議論されるのがよいのかどうか、会場の人たちに別の角度から考えていただきたいです。

もう一つ、先程、会場の1人の方が、大量殺戮兵器について質問されましたが、現在、大量殺戮兵器とされている兵器は、原爆以外に細菌兵器と化学兵器です。日本軍は中国の戦場で2000回以上も化学兵器を使用しました。それも村の人々に「三光作戦」を実行するための兵器として、無差別的に使用したのです。また細菌兵器も、中国の戦場のあちこちで多量に使用されました。当時、長引く戦争に、日本軍は資源があまりないため、力を尽くしてあらゆる手段を講じたのです。

ですから、広島メッセージは世の中に伝えていかなければならない、非常に貴重なものだと思います。日本は原爆の被害を受けた唯一の国として、自分のユニークな経験を世の中に伝えていくこと、また、世界中の人々が命の犠牲としての教訓を受け止められるように、これから大量殺戮兵器を全部廃棄しなければならないというメッセージを伝えることが、非常に大事だと思います。しかし、先程、李先生と水本先生もおっしゃいましたが、アジアの国の人々がそのメッセージをどうしても受け止められない、感情的にも理論的にも受け止めたくない、受け止めなくてもいいというものが存在しているのも事実です。それが先程、先生方もおっしゃいましたが、記

憶による対立です。その対立は是非とも外さなければならぬと思います。

最後にまとめをさせていただくとすれば、今まさに会場の方がおっしゃったとおりなのです。1つは、中国の人たちが自分たちの犠牲者だけを語っているというのは、たぶん偏見なのです。ただ、自分たちの犠牲者が相手に認められていないということ、自分たちが犠牲になったことを知られていないということ、自分たちがどんな暴力を加えられたか無視されていることに対する、大変厳しい怒りがあることも間違いないのです。

戦争の記憶は、多くの場合には「自分たち」、これは多くの場合には「国民」で定義されますが、同じ国民の慰霊、同じ国民の犠牲者を語ることです。戦争の記憶に関する研究は、学者の会合のような言い方をすべきではないですが、イギリスのポーア戦争の研究から始まったもので、イギリス人の死者に関してばかりです。そのあとの戦争の記憶の研究も、結局、自分たちの仲間が死んだことについての調査の研究として継続されてきたわけです。

その中には、戦争の美化につながるものもたくさんあります。アメリカのワシントンには、様々なモニュメントがありますが、私の好きなのはベトナム戦争のモニュメントだけです。このモニュメント以外はすべて、戦争を正しいものと見る、というメッセージがついています。

広島のメッセージは違うではないか、と皆

様は思うかもしれません。確かに違います。どう考えても、戦争の美化とはつながっていません。また、日本国民だけのことを語ろうとしているというものでもありません。

しかし、2つのことに気がつけた方がいいでしょう。というのは、広島の犠牲者については、非常に長い期間、何よりも日本人の犠牲者について語られてきたということです。言うまでもなく、広島には多くの朝鮮の人々や様々な外国人がいました。特に朝鮮半島から連行されて働いていた人々が、多数死んでいたにもかかわらず、ここでの「我々の犠牲」という語り方が、日本人の死者にだけ目が向けられていたということを表しています。その見方は、やはり広島でもある時代まで強かったことを表していることは否定できません。

2つ目の問題はより深刻かもしれません。というのは、広島のメッセージを、広島の外の人にとって支えてきたのは、将来、我々が核戦争の犠牲者になるかもしれないという恐怖でした。日本が核戦争の戦場になるかもしれないという将来の恐怖が、広島への関心を支えてきたかもしれない。ところが、今の核問題は違うのです。日本は戦場にならないけれども海外で、人々が生まれてからずっといいことがないような暮らしをしている貧しい地域で、核戦争の戦場が生まれてしまうかもしれないという問題です。我々が被害者となら

ない核戦争について、我々は語る事ができるのかということが問われているのです。

その意味でも、「自分たち」の経験として語っていく戦争の記憶ではない、それを超えていくような作業がどこかで必要となるでしょう。それは、広島の場合においてさえ必要でありましょう。その意味で、先程の歩平先生がおっしゃった問題に、もう一度戻ってきます。つまり、南京を語ってきた人は、やはり広島を見る必要がある。そして広島を語ってきた人は、やはり南京、念のために言えば、南京だけではなくシンガポールも入りますし、他に数多くありますが、様々な犠牲を見ることによって、無差別大量殺戮がどのような犠牲を世界各地にもたらしてきたのかを見る必要があるでしょう。

最後にもう一言つけ加えるとすれば、無差別大量殺戮を受けた仕返しに、無差別大量殺戮をしていいのかということがあります。相手があんなことをしたのだから何をされても仕方ないではないか、ということが本当に正しい選択なのでしょうか。

広島メッセージで最も重要なことは、報復ではなかった、ということだと思います。あれ程ひどい目にあったら仕返ししてもいいではないかという議論が出てくるのは、むしろ当然かもしれません。しかし、報復ではないメッセージを伝えてきました。無差別大量殺戮に対して、その仕返しをするのではなく、無差別大量殺戮をしないという選択を広島市民が行い、日本国民が行ってきたこと、それが恐らく最も重要な点なのではないかと思います。

大変長時間となりましたが、パネリストの方々、また、ご来場の皆様、本当にありがとうございました。

国際シンポジウム  
**原爆投下をめぐる『記憶』と『和解』**  
— 平和構築における広島の新たな役割を探る —

---

発行者 広島市立大学広島平和研究所  
〒730-0051 広島市中区大手町2-7-10広島三井ビルディング12階  
TEL(082)544-7570 FAX(082)544-7573  
ホームページ <http://serv.peace.hiroshima-cu.ac.jp/>  
Eメールアドレス [office-peace@peace.hiroshima-cu.ac.jp](mailto:office-peace@peace.hiroshima-cu.ac.jp)  
発行 2002年10月